

No. 1378

38年目の祖国

生きていてよかった!／＼

東京に住む金子勝志さん、71才。長い間。教職にあり、校長を最後に第一線を退き、今ゆうゆう自適の生活を送っている。しかし、こんな金子さんにも、ただ一つだけ、ぬぐい去る事のできない、気がかりな事がある。それは、昭和17年に別れたまま、今だ消息のわからない、妹・ふみさんの事である。

ふみさんは昭和17年、当時の日本政府の国策に従い、中国の竜江省へ技術指導員として渡った。昭和20年敗戦。あちこち逃げさまよっていたという。うわさを聞いたものの、ふみさんはいつまでたっても帰ってはこなかった。

昭和28年8月15日、ふみさんはハルビンで死亡したものとして戸籍を抹消された。こうした「未帰還者に関する特別措置法に基づき戦時死亡宣言確定」をした人は全国で2万人を越えると言われている。

元日本兵、横井庄一さん帰国（昭和47年）、元日本兵小野田寛郎さん帰国（昭和49年）、戦後30年たって奇跡的に帰国する元日本兵、金子さんは、それらを喜びながらも、思いはやはり中国に向った。もしかすると、ふみも中国のどこかで、生きているのではないかと……。

昭和46年、名古屋で開かれたピンポン外交が、日本と中国の歴史の流れを大きく変えた。翌昭和47年、長年の懸案だった日中国交が回復。さらに6年後の昭和53年、日中平和友好条約が締結。日本と中国は新しい友好関係をスタートさせた。

昭和54年3月、差出人不明の中国からの手紙が宮城県登米郡中田町の郵便局に届いた。しかし、あて名に記された番地は戦前のものであり、該当する人もなく、そのままになった。1ヶ月後、また届いた。が、今度は差出人伊藤文子と小さく記されていた。“もしや”と、東京の金子さん宅へ転送された手紙はまぎれもなく、妹ふみさんからのものであり、そこには望郷の思いが、綿々と書きつらねてあった。以来、往復書簡は百通を越えた。

昭和55年4月25日、成田空港。中国民航の特別便で、ふみさんは今、38年ぶりに祖国へ帰ってきた。2人の子供とともに。東京で落ちつく間もなく、ふみさん親子は故郷の宮城県へ向った。子供の頃一緒に遊んだ友だちや、同級生たちもかけつけてくれた。その日の夜は、村をあげて歓迎。余り感情を出さないふみさんにも笑顔が戻ってきた。日本語のわからない子供たちにも心は通じたようだ。翌朝、早く目覚めたふみさんは、一人で北上川の土手を歩いた。

ふみさんは「敗戦直後、中国は私たちに非常にあたたかい手をさしのべてくれた。妹や姉のようにしてくれた。中国の兄弟たちがよくしてくれたので、自分も中国の兄弟たちに奉仕したいという気持ちでいっぱいだった。今、38年ぶりに生きて帰れて本当にうれしい。これからは子供たちにも教え、中日友好のために、自分のできる範囲で努力していきたい」

今はなき両親の墓前に立つふみさん。日本での38年間の空白は、中国で立派に埋めた。長女フィピンさんは言う。「お母さんのような人になりたい」と。